

ミス・コ  
ール

闇からの着信

雪姫

# 1 昔のケータイ

---

## 1 昔のケータイ

その日はいつもと何一つ変わらない、平凡な日曜の午後だった。

中学生の真田冬輝（ふゆき）は自室のベッドの上に寝そべり、買ったばかりのCDを聞きながらマンガ雑誌をめくっていた。

部活は休み。試験も先週終わったばかり。とり立てて今すぐにやらなきゃいけないこともない。これを読み終わったら、レンタル屋にでも行くか。

そんなことを考えながら二個目のポテトチップスの袋を開けたところで、

「冬輝！ 冬輝！」

姉、ミホのかん高い声がメロディの隙間から耳に飛び込んできた。ミホは高校生、冬輝より三つ上の十七才だ。

「聞こえてるの？ 冬輝」

返事をする間もなくドアが乱暴に開く。

「何だよ、勝手に開けんなよ」

「だってさっきから呼んでるのに」

「いいから、なに」

「あんたのMD一個貸してくれない？ 使いたいんだけどちょうど切らしちゃって。あとでちゃんと返すから」

「ああもう、めんどくせーなあ」

冬輝はうめくように言うと、渋々ヘッドホンを外して立ち上がった。

「あんた、買い置きしてたよね」

「たぶん」

確かこの中にあったっけ……。

冬輝は机の一番下の引き出しを開けた。が、途中で何かが引っかかってちゃんと開かない。力任せに無理矢理引っ張ると、引き出しの中は、わけのわかんないモノ、モノ、モノであふれかえっていた。

そういえばここ最近、引き出しなんて開けたことがなかったな。えーと、MDMD……。

「あ、ほら、そこにあるじゃない」

ミホが先に見つけて、さっさと目的のモノを取り出した。

「それにしてもひどいね。ぐちゃぐちゃじゃない。たまには整理しなさいよ」

「うるせー」

ミホが行ってから、姉に言われたからというわけではないが、冬輝は引き出しの中の片付けを始めた。いや、というより、そこに入っているものの確認作業、といったほうが正確かもしれない

。 使いかけのケシゴムとか、何かの景品でもらったファイルとか、昔遊んだゲームとか、変ちくりんなもんがいっぱい出てくる。こりゃほとんどゴミだな。

「あ、これ」

冬輝は思わず声を上げた。ケータイだ。小学生の時に初めて買った携帯。

「ひえー、なつかしいなあ」

今のヤツに変えた時に解約して、そのままにしてたんだった。

いかにもガキ向けのカラーにでっかいボタン。当時、男子の間で流行ってたキャラクターのストラップがジャラジャラついている。

冬輝は、その妙に横幅の広い、オレンジ色の携帯を手に取り、適当にボタンを押してみた。

——それはもちろんただのいたずらだった。いや、そのはずだった。

そんなことをしてもどこにもつながるはずがないってことはわかっていた。むしろそうじゃなければいけないはずだ。だって引き出しの奥から見つけたこれは、もう何年も前に解約した携帯。

いわば過去に置いてきたモノだ。そもそも電源すら入るはずがない。

それなのに——、冬輝が適当に押した番号がどこかにつながったのだ。確かに呼び出し音が鳴っている！

嘘だろ……。

呼び出し音が途切れ、誰かが出た気配がした。冬輝はそのまま携帯を耳に押し当て続ける。

「……さ……しい……」

何だかよく聞こえない。

「……し……い……」

「ああん？」

「寂しい……」

「は？ 何言って——」

「寂しいよう！ 寂しいんだよう！」

「うわっ！」

冬輝は思わず携帯を投げつけた。

何だよ、これ！

不気味な声だ。男か女かもよくわからない。押し殺したような、まるで地の底から聞こえてくるような——、でも若いヤツかもしれない。自分と同じくらいの……。いや、そんなことより今電話に出たのは誰なんだ？ どこにつながったんだ？

冬輝はまたおそるおそる携帯を拾って耳に近づけてみた。もう何も聞こえない。さっきの衝撃で切れてしまったようだ。

「気持ちわりっ！」

冬輝はその携帯をゴミ箱に捨てようとしたが、思い直し、また引き出しの中にしまいこんだ。

自室を出てリビングに行くと、ミホがテレビを見ながら携帯をいじっていた。

「姉ちゃん」

「ん？」

「携帯ってさ、普通に捨ててもいいんだっけ？」

「何よ、あんた携帯捨てるの？」

「いや、前のやつが出てきたからさ」

「ふうん。まあ悪くはないと思うけど、普通はリサイクルに出したりするんじゃない」

「それって、どうすればいいの」

「買ったお店に持って行けば、引き取ってくれるはずだけど」

「そっか。わかった」

冬輝は部屋に戻って、一度しまった携帯をまた取り出した。

明日学校の帰りに携帯ショップに寄ってこれを返してこよう。絶対にそうしよう。こんな気味の悪いの、もう持っていたくない。

冬輝はそう固く決心し、そのオレンジ色の携帯電話をカバンのサイドポケットに入れた。

## 2 現れた分身

---

### 2 現れた分身

昼休み。給食に出たクリームシチューのにおいがまだただよっている教室で、クラスの連中が騒いでいる。

——うるせえなあ。

冬輝は机に突っ伏したまま、口の中でつぶやいた。

昨夜はあれからあの不気味な声が頭に響いて眠れなかった。とにかく眠い。このままじゃ五時間目の数学は地獄だ。少しでも眠りたいのだが、キンキンした声がうるさくて眠れない。原因はあいつだ。

曾根雄一。

うぜえんだよ、全く。中二にもなってガキみたいにギャアギャア騒ぎやがって。

冬輝は、曾根の、前歯が大きなちょっとネズミに似た顔を思い浮かべた。

あいつは一年の頃からどうも虫が好かない。大体いつも無駄にテンションが高すぎるんだよ。チビのくせに調子にのりやがって。

「死ねや」

冬輝は自分だけに聞こえるように言い、イライラしながら顔を上げた。

次の瞬間、冬輝の頭から一気に眠気が吹っ飛んだ。

黒板の横に——そこに、自分が立っている！

制服を着て、突っ立ったままじっとこっちを見ている。

えっ、あれって俺？

冬輝は自分の頭がおかしくなったのかと思った。

いや、あれが俺のはずがない。だって今、俺はここに……ここにいるじゃないか。

冬輝は、両手でベタベタと自分の身体を触ってみた。間違いない。俺はちゃんとここにいる。じゃあ、あそこにいる、あれは一体誰だ？ わけがわかんねえ。

冬輝はそっと周りを見渡してみた。特に変わりはない。誰も気付いていないのだろうか。

もしかしたら他のやつらには見えていないのか——？

その時だ。ワアワア騒ぎながら教室内を走り回っていた曾根が、ちょうどそいつの横を通り過ぎようとした。と、その冬輝そっくりのそいつが、曾根の腕をつかまえた。そして、そのまま曾根を窓までズルズルと引きずっていき、そこからいきなり曾根の体を突き落とした。

「ぎゃああああああ！」

曾根の叫び声が響いたかと思うと、すぐにドサッという鈍い音がした。

「大変だ！ 曾根が落ちた！」

一気にクラス中が騒然となった。

「ヤダ、今の声、なに？」

「落ちた！ 曾根が窓から落ちたんだよ！」

「嘘だろ」

教室内にいたみんなが一斉に窓際に駆け寄っていく。

騒ぎにまぎれて冬輝も席を立ち、恐る恐る窓の下を見下ろしてみる。みんなの頭の間からうつぶせで横たわっている曾根の姿が見えた。

「し、死んでるのかな」

「わかんねえよ」

「とにかく先生呼んでくる！」

誰かが教室を飛び出していった。

そうだ、アイツは？

冬輝ははっとして教室内を見回した。どこにいった？ さっきの……。

——いない。いつのまにか消えている。

（一体何が起きたんだ？ これは、本当に俺がやったのか？ いやまさか。俺はずっと席に座っていた。俺じゃない。でも曾根を引きずってここから突き落としたのは、あれは間違いなく俺だった。何だよ、これ。ほんとにわけわかんねえ。どうなっているんだ？）

冬輝は、クラスメートたちの泣き声や騒ぎ声が交差する教室の隅で、彼らとはまた違う種類のパニックに、ひとり陥っていた。

### 3 クラスメートの死

---

### 3 クラスメートの死

曾根が死んだ。担任の説明によると、頭を打ち、ほぼ即死だったそうだ。

事故のあった当日は、午後の授業は当然中止になり、無関係の学年の生徒たちは急遽家に帰された。だが、冬輝たち二年A組は、全員が学校に遅くまで残され、状況を調べに来た警察や教師らから何度も同じことを質問された。

しかし、大人たちからどんなに問いただされたところで、生徒たちが口にすることは皆同じだったのだ。

「曾根君が落ちたときはどんな状況だったのかな」

「状況も何も……。てか、曾根が勝手に自分から落ちた」

「じゃあ、直前に誰かとふざけ合っていたということは？」

「うーん。教室の中を走り回ってたけど、窓のそばにいたわけじゃなかった」

「はっきり聞くが、曾根君が誰かに押されて落ちたということはないのか。正直に言いなさい」

「違います。曾根が自分で落ちました」

「その時、窓の近くには曾根君の他に誰かいたのか」

「いなかったと思います。うん、誰もいなかった」

「そうか。じゃあ、質問を変えよう。彼はふだん何か悩んでいた様子はなかったか」

「いや、別に・・・」

「窓から落ちる直前の彼はどんな様子だったかわかる？」

「どんな、って……。だから、普通に友達と騒いでた」

「じゃあ、楽しく友達と遊んでいた彼が、何の理由もなく、いきなり窓に近寄って行ってそこから飛び降りたというのか。そんなバカな話はないだろう」

「でもそうなんです」

実際あの様子では、誰だってこう説明するしかない。

当然冬輝も皆と同じことを言った。もう一人の自分が急に現れて、そいつが曾根を窓まで無理矢理引っ張っていき突き落とした、などとはとても言えなかった。そんなことを言ったところで、気がふれたと思われるか、下手すれば冬輝自身が疑われる恐れもある。いや、百パーセントそうなるだろう。

警察や教師たちは、クラスで何か揉め事があり、生徒たちの中の誰かが曾根を突き落としたのではないかと決めてかかっていたようだったが、その場を見ていた者全員が「曾根が自分で落ちた」と口を揃えたのだ。これではどうしようもない。生徒たちが口裏を合わせているということは考えづらいし、またそんな時間もなかったはず――。

特に学校側は、生徒に自殺されるよりも、まだ生徒同士の事故であってくれたほうが体裁がよいという思惑もあったはずだ。だが、現場の状況も含め、特に誰かがやったという証拠も出てこ

なかった。

それに事故とするには、やはり二年A組の生徒たちの証言がネックとなった。

曾根が自分から窓に近付いていき、いきなり頭から落ちた。その際、窓の近くには本人以外誰もいなかった――。

これがもし窓のそばで誰かとふざけていたとか、あるいは本人が身を乗り出していた、などの行為があったあとならば、不注意による事故の可能性が高くなるが、生徒たちの証言が本当だとすれば、どうしても彼が明確な意志を持って自ら落下したと考えざるをえない。

結局、曾根の死は自殺ということで断定された。

しかし、曾根が自殺とされたことについて一番釈然としない気持ちを持っていたのは、あの時教室にいた、当のクラスメートたちだったかもしれない。

大体いつもあんなにハイテンションで騒ぎまくっていたやつが、自殺なんかするはずがない。ありえない。このことは「曾根は自分で落ちました」と証言しながらも、クラスの皆が心の中でひそかに抱いた疑問だったに違いない。

とにかくこれではっきりしたことがある。と、冬輝は思った。

アイツ――、曾根を突き落とした真犯人、もう一人の冬輝の姿を見たのは、いや、見ることができたのはどうやら冬輝本人だけだったらしい。あの時、クラスの中で冬輝以外に真実を目撃したやつはいない。そう考えて間違いなさそうだ。

それにしても――。自分にしか見えないもう一人の自分がいて、そしてその自分が人を殺したただなんて、こんなとんでもないことが本当に起きたのだろうか。

もしかしたら単なる見間違いだったのかもしれない。いや、違う。あれは絶対に見間違いなんかじゃない。でも……。何がなんだかわからない。

この時冬輝は、自分の周囲で起こりつつあることの気配に、ただおびえるしかできずにいた。

4 ミスコール

それからしばらくの間、学校内では曾根が死んだ話でもちきりだった。

新聞や週刊誌にも、

「中学二年男子、五階教室の窓から飛び降り自殺。学校内でいじめか？」

「直前まで友人らと談笑。問われる教師の責任」

「十四才少年、謎の飛び降り自殺。教室で何があったのか？」

などのセンセーショナルな見出しが躍った。

校門の前には、マスコミの関係者たちが常時張り付いて、生徒たちから何か情報を聞きだそうと待ち構えている。

そんな、どう見ても異常な状況の中で、一応通常の授業が始まった。

――ヒマだな。

生徒が一人死んだあとも変わらない、退屈極まりない授業。廊下側の列の前から二番目の机に、白い花を生けた花びんが置かれている。曾根が座っていた席だ。

冬輝は、松村という中年の女教師が読む英文を、耳に入るそばから頭の外に追い出しながら、見るともなしにその白い花を眺めていた。

――曾根は自殺なんかじゃない。この目で確かに見たんだ。アイツが、俺の姿をしたヤツが曾根を突き落とすところを。結局、曾根を殺したのは自分なのだろうか。いや、まさか。そんなはずがない。それじゃ、あの時見たアレは何だったんだ？

あれ以来、この疑問が、起きている間中、冬輝の頭から片時も離れることはなかった。冬輝自身、いつか自分が本当に気が狂ってしまうのではないかと、本気で心配になるほどだった。

もしできることなら、誰かにすべてを話して楽になりたいとも思う。でもそんなことはとてもできそうになかった。親にも友達にも先生にも、まして警察にも、誰にも話せない。話せるわけがない。そんなバカな話を信じてもらえらるとはとても思えなかった。自分のしたことの言い訳をしているととられるか、精神病扱いされるのがおちだ。

と、いきなり携帯音が鳴った。

(げっ、授業中なのに。ヤバ・・・)

冬輝は慌てて机の横にかけていた通学用のカバンを取り、手を入れてカバンの底をまさぐった。

――変だな。朝、ちゃんとマナーモードにしていたはずなのに。

携帯を取り出すと、案の定着信はしていない。なのに、まだ着信音が鳴っている。

どこだ？ 自分の携帯じゃないのか？ いや、確かにこのカバンの中から聞こえている。

冬輝ははっと気付いた。

あれだ。あの、例の古い携帯のほうだ。あの日、学校の帰りにショップに行って引き取ってもらったつもりでカバンに入れたまま、すっかり忘れていた。あんなことが起きてそれどころじゃなか

ったん

サイドポケットからその古い携帯を取り出す。やはりそうだ。着信ランプが点滅している。またか……。冬輝は、背筋に不快な寒気が走るのを感じた。

これは、とっくの昔に解約しているはずだ。ということは、どこからも誰からもかかってくるはずがない。しかし確かに今、この携帯に誰かが電話をかけてきている。ディスプレイを見ると、携帯かららしい番号が表示されている。

「090-2×2×-4×6×」

これを見ても、発信先がどこなのか特に思い当たらない。

冬輝はいぶかしく思いながら、とにかく急いで電源を切ろうとした。と、突然受話器の向こうから声がした。

「そんなに慌てなくても大丈夫だよ。着信音は他のやつらには聞こえていないから」

誰だ？ わからない。

「この前みたいいきなり切らないでよ。お願いだから」

ああ、そうだ。冬輝は確信した。あの時……。曾根が死んだ前日の日曜日。部屋でこの古い携帯を見つけて、いたずらのつもりで適当にボタンを押してみたら、なんとどこかにつながった――あの時に聞こえた声と同じだ。

「授業中でしょ？ わかってるよ。そっちは何もしゃべらなくていいんだ。こっちで勝手に話すから。君はただこの携帯を耳に当てているだけでいい」

「……」

「この前のこと、気にしてるでしょ？」

冬輝が黙っていると、

「お友達を殺したのは、君だよ」

「！」

冬輝は、大声が出そうになるのをなんとか押さえた。

「正確には、君本体じゃなくて君の分身だけだね。君も見てたでしょ？」

「で、でも俺じゃない」

たまらず冬輝は小声でそう言った。

「でも君、あの時『死ね』って言ったはずだよ」

はっ？ 俺が？ 冬輝はまだ新しい記憶を必死でたぐり寄せる。

そうだ、思い出した。確かにあの時、曾根があんまりうるさいのにイラついて「死ねや」そう言った。でもそんなの本気じゃなかった。当たり前じゃないか。死ね、くらい誰だって言うだろう。だから自分が殺したことになるっていうのか？ いや、そんなことより、今電話の向こうでしゃべっているコイツはそもそも誰なんだ。なんだって、こっちの状況をいろいろ知っているんだ？

「君の分身は、君の言葉に忠実に動いたんだ。君があの子のことを『死ね』と言ったからね」

「な、なんで、そんなこと……」

「便利でしょ？ 君にプレゼントだよ。僕からの」

「プレゼントだって？」

「君が僕のところに電話をかけてきてくれたお礼だよ。携帯が鳴った時は嬉しかったなあ。僕、ずーっと一人ぼっちだったんだ」

「な・・・」

「ね、友達になってよ。寂しいんだ、僕」

「おまえ誰だよ。悪ふざけはやめろ」

「あれ、信じないの？ じゃあ、証拠を見せてあげるよ。前を見て」

言われて目を上げると、教壇の横に冬輝が立っている！ いや、これは・・・、相手の言葉を借りるなら、冬輝の分身というのか――。いずれにせよ、あの時と同じだ。

「これは・・・おまえのせいなのか」

「やだな。せい、っていうのは聞こえが悪いよ。言っただろ。あれは君の分身だって。これから君は、殺したいと思うヤツが現れたら『死ね』と言葉にするだけでいいんだ。あの時みたいにね。そうすれば代わりに分身がそいつのことを殺してくれる。だから君は自分の手を汚さずにすむし、絶対に捕まらない」

「うるさい！ おまえは誰だ。何者なんだ！」

思い切り怒鳴ってから、冬輝は、はっと我に返った。

――ヤバイ。授業中だった。クラスのやつらがみんな驚いた顔でこっちを見ている。

松村がカツカツと靴音を立てながら歩いてきて、冬輝の横に立った。

「何してるの、真田くん。今は授業中でしょう」

「すみません・・・」

「これは私が預かります。あとで職員室に取りに来なさい」

松村は冬輝の手から携帯を取り上げると、それをスカートのポケットにしまい、朗読を続けながら教壇に戻っていった。

「何してんだよ。バーカ」

後ろの席の達也の言葉が引き金となり、一気にクラス中に嘲笑が広がった。

「静かにしなさい！」

松村がヒステリックに怒鳴る。

――失敗した。しかしこの際そんなことはどうでもいい。

冬輝はグシャグシャと髪の毛をかきむしった。

もうだめだ。以前より頭の中が混乱している。今のヤツは誰なんだ？ そもそも解約したはずのあの携帯に、どうしてつながるんだ。そうだ。聞き出したいことは山ほどある。もう一度あいつと話さなければ。

教壇に目をやると、冬輝の分身というやつが、こっちを見てにやりと笑っている。

冬輝は、今すぐ席を蹴って外に飛び出したくなるのを何とかこらえた。

なぜか、曽根の席に置かれた白い花の束が、自分をめがけて襲ってきそうな気がした。

5 教師の死

昼休み。冬輝は、給食を食べ終わるとすぐに職員室に行った。

普段はめったに寄り付かない場所なのだが、今は一刻も早くあの携帯を返してもらわなければ。普通の携帯ならまだしも、あの携帯だけは――他人の手に持たせておくわけにはいかない。強くそう思った。

「失礼します」

中に入ると、

「ああ、真田くんね」

松村が椅子に座ったまま、にらむように冬輝を見る。

――けっ、ゴキブリでも見るような目で見やがって。自分で取りに来いって言ったくせに。

冬輝は、すでに自分でもはっきりと自覚できるくらい、いらつきを覚えていた。

「あのね。真田くん。先生もうがっかりよ」

「はあ、すみません」

「授業中に、あんなに堂々と携帯を使うなんて、そういうことをしてもいいと思ってるの」

「いや」

「誰と話していたの。この学校の子？」

「さあ」

「さあ、じゃないでしょう。こういうことがあるから、学校に携帯を持ってきちゃいけないって規則があるの。わかる？」

ああもう、ねちねちねちねち、うるせえなあ。いいから早く返せよ。

そう喉まで出かかったのを、冬輝は何とか飲み込んだ。

「ほんとにねえ。あなたは、まじめなほうだと思っていたのに」

「・・・」

「黙っていないで、何か先生に言うことはないの」

だから最初にちゃんと謝ったじゃねえか。そう思いながら冬輝は、

「これから気をつけます」

と、わざと抑揚をつけずに言った。

「今回はこのまま返すけど、今度また同じことがあったら、おうちの人に話しますよ」

はいはい。わかったから早く返せって。

冬輝が、携帯を取るために手を伸ばしかけると、

「おう、真田。どうかしたのか」

突然、ごつごつした手が冬輝の肩に置かれた。

振り向くと、体育の早坂が立っていた。こいつは冬輝が所属しているサッカー一部の顧問でもある

。典型的な運動バカだ。

あーあ、またうるせえのが来た。

冬輝は思わず顔をそむけた。

「おまえ、今度何かしたら、もう大会に出さないって言うておいたはずだぞ」

今度？ ああ、この前のアレか。

冬輝は、一ヶ月前の出来事を思い出した。たまたま教室でアメを食べていたのをこいつに見つかり、連帯責任とかいうわけのわからない理屈で、三日間部活停止になったのだ。あの時は、いやというほどこいつにお灸をすえられた。たかがアメくらいでほんと、あほくせえったらねえ。

「おい、真田。わかってるんだろうな」

「はい」

けっ、えらそうにしやがって。こういうのを職権乱用というんだ。

心の中で思い切り毒づきながら、冬輝が職員室を出ようとする、自分の机に戻った早坂が大口を開けて菓子にかぶりついているのが目に入った。

「早坂先生。お茶お淹れしますね」

若い女の事務員が気をきかして立ち上がる。

「ああ、すみません。できればコーヒーにして頂けませんかね」

早坂の間延びした声を聞いた瞬間、冬輝の頭にカッと血がのぼった。

クソ！ ふざけんなよ。生徒がアメ一つ食っただけであんなに大騒ぎするくせに、自分は職員室で菓子をコーヒーかよ。いい気なもんだ。クソ野郎。

「死ねや」

廊下に出ると、その言葉が無意識に口をついて出た。

「あっ、ヤバイ・・・」

すぐにそう思ったのは、

「これから君は、殺したいと思うヤツが現れたら『死ね』と言葉にするだけでいいんだ。そうすれば代わりに分身がそいつのことを殺してくれる」

という、さっきの不気味な声の主が言ったことを思い出したからだ。

――はん、ばかばかしい。

冬輝は、大きく息を吐いた。そして、

「あんなの、嘘に決まってるよな」

自分自身に言い聞かせるように、そう声に出して言った。

しかしそのそばから、急にたとえようなない恐怖感が全身に突き上げてくる。

冬輝は、教室には戻らず、そのまま学校を飛び出した。なぜかわからないが異様な恐ろしさを感じる。震えが止まらない。

その恐怖を振り来るように冬輝は全速力で走った。階段を降り、校庭を横切って、扉が閉まったままの校門を乗り越える。ブレザーのポケットの中で、今戻ってきたばかりの携帯が激しく揺れた。

学校の裏手に、ふだんあまり人気のない公園がある。

冬輝は色あせたベンチの前に立ったまま、携帯を持ち、フタの開け閉めを何度もくり返していた。もう下校時間なのだろうか、黄色いランドセルをしょった子供たちが数人、団子のように固まりながら、公園の横を通り過ぎて行く。

冬輝は意を決したように、着信履歴の画面から通話ボタンを押した。もしさっきの番号が本当にあるのなら、きっとかかるはずだ。恐る恐る携帯を耳に当てると、やはり呼び出し音が鳴っている。

「やっぱりかけてきてくれたね」

すぐに誰かが出た。さっきのあの声だ。

「きっと君は、ここに電話をかけてくると思った」

「さっき言ったこと、もっとちゃんと説明してくれ」

「いいよ。何でも聞いてよ」

「まず、今この電話で俺と話しているおまえはどこの誰だ。何者なんだ」

「僕？ 別に何者でもないよ」

「ふざけんな。今おまえ、どこにいるんだ。大体この携帯でどうして通話ができるんだよ」

「まあそうわめかないでよ。ね、そんなことより、君、プレゼントは気に入ってくれた？」

「はっ？」

「やだなあ、とぼけないでよ。わかってるくせにさ」

「…」

冬輝は黙り込んだ。電話の音が、冬輝の気持ちを見透かしたように口を開く。

「じゃあもう一度言うよ。君がこれから誰かを殺したくなったら、『死ね』って口にするだけでいいんだ。わかるよね？」

「…」

「君の分身——アイツの姿は絶対に他のやつらには見えない。だから君は、誰にも気付かれずに、気に入らないヤツをこの世から削除することができる」

「削除？」

「そう。実際あの時はうまくいったでしょう」

「そ、曾根が死んだのは、おまえのせいだ！ 俺は知らない。関係ない！」

「その言われ方は心外だなあ。君のために、せっかくあの『トクベツなチカラ』をプレゼントしてあげたのに」

「だから、何で俺に——」

「言ったじゃない。君が僕の携帯に電話してくれたお礼だよ。あの時僕、ものすごく嬉しかったんだ。前にも言ったでしょう。ずっと一人ぼっちだったんだ。僕」

気色悪いんだよ。この野郎！

冬輝は心の中で怒鳴った。

「そんなチカラ、いらなくて言ったらどうする」

「それはありえないね」

急に電話の音が、それまでのなよなよした感じから一転、低いトーンに変わった。

「一度も人を殺したいと思ったことがない人間なんていないよ。人を殺しても絶対につかまらないってことが保証されていたら、殺してやろうと思うヤツの一人や二人、必ずいるに決まってる。誰だってね」

そう言われれば、確かにそうかもしれない。冬輝は返事をする代わりに、軽くため息をついた。

「だから遠慮なく使ってよ」

「おまえの正体を教えろ」

「そんなの、別にないって言ってるじゃない」

「まともな人間じゃないだろう」

「さあ、どうかな」

ふざけんな。またそう言いかけた時だ。いきなり空気を切り裂くような、けたたましい音が周囲に響き渡った。音のする方を見ると、パトカーが数台走り去っていくのが目に入った。その後を救急車が続く。学校の方角だ。

——学校で何かあったのか？

嫌な予感がして、冬輝は携帯を胸ポケットに投げ入れ、急いで学校に戻った。

大通りに面した門から校内に入り、校舎の脇を抜け、校庭に行くと、みんなの輪の中に救急車が止まっている。

やっぱり何かあったんだ……。

その場に立ち尽くしていると、冬輝を見つけた達也がこっちに向かって走ってきた。

「冬輝！ おまえどこ行ってたんだよ。五時間目サボってたろ」

「ちょっとな。それよりどうしたんだ、これ」

「早坂が自殺したんだ」

「ええっ！」

嘘だろう……。冬輝は、心臓が急にどくどくと鳴り出すのを覚えた。

「なんかさ。サッカーの授業中、いきなり自分でナイフを胸に突き刺したらしいぜ。ひでえよな」

「そんな……」

足に力が入らない。とっさに、足元に転がっていたサッカーボールを拾うふりをしてしゃがまなければ、冬輝は、もう少しで横にいる達也にもたれかかってしまいそうだった。

「そ、それで、あいつ死んだのか」

「さあ、どうだろ。救急車が来たってことは、まだ生きてんじゃねえか」

早坂を乗せた救急車がサイレンを鳴らして校庭を出ていくと、周囲には、どこか気まずさを含んだ、居心地の悪い静粛が一気に広がった。少し間をおいて、教師たちがはっとしたように動き始める。

「ほらほら、みんな早く教室に戻りなさい！」

「各自、教室で待機！」

口々にそう言いながら、生徒たちを追い立てていく。

冬輝もその人波に押されるように歩き出した。そして、ぎくりとして足を止めた。目の前に、校舎の脇にアイツが立っている。アイツー。冬輝の分身だ。目が合った。アイツはすかさずこっちを見てピースサインを出した。

やっぱり……。早坂は自殺なんかじゃない。アイツがやったんだ。アイツが早坂の胸をナイフで刺したんだ。

冬輝はそう確信した。

その日の夕方のニュースで、早坂の死亡が報じられた。若い女のアナウンサーが、傷は背中まで達しており、ほぼ即死だったということを伝えていた。恐ろしく感情のない声で。

6 トクベツなチカラ

「冬輝。ごはんできたって」

またいきなり部屋のドアが開いた。ミホだ。

「いらねえ」

「へえ、あんたがごはん食べないなんて珍しいじゃない」

ミホが、嫌味を言う時のクセで、片方の眉を上げながら言う。

「具合でも悪いの」

「うるせえ、いいからさっさと行けよ」

冬輝は立ち上がって、ミホから奪い返すようにドアを閉めた。

「何さ、バカ。わざわざ呼びに来てやったのに」

悪態をつきながら、ミホがリビングに戻っていったのがわかった。

冬輝は、それを確認してから、身体を投げ出すようにベッドに寝転んだ。

メシなんかとても食う気分じゃない。

今日はあれからずっと、電話の相手が言った言葉が、頭のあちこちにベタッと貼り付いて離れない。

「誰にも気付かれずに、気に入くないヤツをこの世から削除することができる」

削除。確かにそう言っていた。

削除――か。冬輝は、白いゴツゴツした天井を見ながら考える。

今まで、人を殺すことはいけないことだと思っていた。あまりにも当たり前すぎて、深く考えてみたこともなかった。でも、要は殺人なんて、単にこの世からくだらない人間を削除することに過ぎないのかもな。そう考えれば、人を殺すことは、必ずしも悪ではないのかもしれない。いや、それどころか、場合によっては、誰かのためになることだってあるんじゃないのか。

そう考え付いた時、胸につかえていた何かが落ち、すっと楽になった気がした。

冬輝は、そばに置いていたオレンジ色の携帯をつかみ、今度はリダイヤルボタンを使ってあの番号にコールした。午後の時と違い、今回は、呼び出し音が鳴っている間もずっと耳を離さずにいられる。すぐに、あの声が聞こえてきた。

「嬉しいよ。またかけてきてくれたね。待ってたんだ」

「おまえさ。そんなに俺と話したいんなら、またそっちからかけてくればいいじゃねえか」

「えっ、いいの？ 迷惑かなと思ってこれでも遠慮してたんだよ。一応ね。これからは電話してもいいんだね」

「まあ・・・どっちだっていいよ」

「よかった。僕と友達になってくれるんだね」

「――今日、早坂が死んだよ」

冬輝は、「どうせおまえは知ってるだろうけどな」と心の中で付け加えた。

「よかったじゃない。むかつくヤツがいなくなっさ」

「本気で言ったわけじゃない」

「ふうん」

「ついついのクセでさ。別に深い意味なんかなかったんだ」

「同じことだよ」

「俺が、早坂を殺したことになるのか」

「さあね。考え方しだいじゃないの。君が直接手を出したわけじゃないんだしね」

「おまえ、アイツは俺の分身だ、って言ったよな。分身がしたことは、俺がしたことと同じになるんじゃないか」

「そう思うなら、別に何もしなければいい。これから誰に会っても『死ね』と言わなければいいんだ。それだけの話だよ。嫌なヤツを削除するのもしないのも、全部君の自由なんだから」なるほど。考え方しだい——か。

「なあ、これって取引なのか」

冬輝は、ここでやっと身体を起こした。

「どういう意味？」

「そっちが俺に、その『トクベツなチカラ』というやつをくれることで、そっちにも何かメリットがあるんじゃないのかってことだよ」

「やだなあ。そんなの何もないよ。君が電話をかけてきてくれたお礼だって何回も言ってるじゃない」

「まあいいけどさ」

「そんなことより、身近な人が死ぬって、やっぱりショックなのかな」

聞かれて、冬輝はとっさに、

「いや、どうかな」

と言った。

「生きていても意味のない人間はいるからな」

これが本心だといえは嘘になる。が、じゃあ、ただ単に強がってみせただけなのかと聞かれれば、そうとも言い切れない。冬輝は、そこのところを自分でもはかりかねていた。

「正直だね。じゃあ僕のプレゼント使ってくれるんだね」

冬輝は少し間をおいてから、

「ま、悪くはないかもな」

と言った。言ってから、これってつまらないゲームソフトを妥協して買う時みたいだな。ふっとそう思った。

翌朝。ダイニングに行くなり、冬輝は、テーブルの上のカゴに盛られたバターロールをつかみ、そのまま口の中に放り入れた。

「やーね。マーガリンとジャム出てるでしょ」

すかさず母親が咎める。

「いいよ、めんどくせえ」

悠長にジャムなんか塗ってられっか。昨夜は、あれから結局何も食べずに寝てしまった。さすがに死ぬほど腹が減っている。

向かいの席で、ミホがバターロールにソーセージをはさんだものを食べながら、新聞をめくっている。

「姉ちゃん、ちょっとそれ見せて」

「待ってよ。今読んでもの」

「いいから」

「何すんのよ」

冬輝は、ミホが文句を言うのもかまわず、新聞を無理矢理自分のほうに引き寄せた。いつもはテレビ欄しか見たことがないが、今日はトクベツだ。何度か紙をめくると、すぐに早坂のことが書かれた記事が見つかった。

冬輝は二個目のパンにかじりつきながら、その細かい文字を拾い読みしていく。

『――中学校教諭、謎の自殺――体育の授業中、所持していた小型ナイフで胸を一突き――多くの生徒が目撃――動機は不明だが、教諭は、先月この中学校の生徒が、校内で飛び降り自殺をしたことに対する責任を感じていたという証言があり、警察は詳しい動機を調べている――自殺した教諭は、普段より生徒指導にも熱心で、生徒たちの信頼も厚かった――』か。へえ。ものは書きようだな。

冬輝は口の端をゆがめた。自分では笑ったつもりだったのだが、何を誤解したのか、ちょうどデザートのリングを運んできた母親が、

「冬輝。学校でこんなことが続いて、あなたもショックだろうと思うけど、気をしっかりもってね」

深刻そうな顔でそう声をかけてきた。

「わかってるよ」

「今日ちゃんと学校に行ける？」

「当たり前だろ」

ミホがいつものように弟をからかおうとして、慌てて言葉をのみ込んだのがわかった。彼女なりに場の空気を察したということだろう。

バカじゃねえの。みんな何でそんなに俺に気をつかうんだよ。そもそも俺がしでかしたことなのに。そうだよ。これは全部、俺が、俺がやったんだ！ この俺がな。真実を知ったら、こいつらどんな顔するんだろう。

冬輝は、今度は大声で笑い出しそうになったが、残りのパンの咀嚼に集中することで、何とかその欲求をおさえた。

長々とどうでもいいような天気予報をやっていたテレビが、ニュースのコーナーになった。それまで女子アナを相手に軽口をたたいていた司会者が、とってつけたようにまじめな表情を作る。

「東京都〇〇区の中学校で、体育教諭が自殺した問題で、校長が記者会見を開きました」。母親とミホ、冬輝の三人が示し合わせたように一斉に顔を上げた。

テレビの画面に、ハゲたガイコツみたいな顔の校長が映っている。

「亡くなられた早坂先生は、どんな先生でしたか」

「それはもう、教育熱心な素晴らしい先生でした。あんなにいい先生がどうしてこんなことに……。まことに残念でなりません」

ガイコツは声をつまらせている。

「――げっ、マジかよ。」

冬輝は、口に含んだコーヒーを吐き出しそうになった。

どこがいい先生だよ。むしろ、あんなに生徒に嫌われてた教師もいないぞ。大体、あいつが生徒のことで責任を感じて自殺なんかするようなタマかって。

「生徒の前で自殺なんてねえ……」

「気持ち悪い」

母親とミホはまだ画面に見入っている。

「俺、もう行く」

冬輝が席を立つと、母親もはじかれたように立ち上がった。そして一緒に玄関先までついてくる。珍しい。いつもは化粧やら後片付けやら、何だか知らないがやたらとバタバタしていて、わざわざ見送りに立つことなんかまずないのに。

「気をつけてね」

「うん」

冬輝は母親のほうを振り返らずに、ドアを閉めた。通路を歩き、エレベーターの降ボタンを押す。このマンションは、コスト削減のためかどうか知らないが、世帯数に比べ絶対的にエレベーターの数が少ない。そのため、朝は大体イライラすることになるのだが、今朝は冬輝の前にすぐエレベーターが降りてきた。

毎朝こうならいいんだけどな。冬輝は鼻歌交じりでその四角い箱に乗り込み、壁に貼られた鏡をのぞき込みながら、ヘアスタイルを整えた。

マンションの敷地を出て、大体五分も歩けば、学校を囲んでいる緑色のフェンスが見えてくる。手前の信号を渡ると、校門の前に報道陣がたくさん集まっているのが見えた。カメラマンやマイクを持ったレポーターみたいな人がウロウロしている。曾根の死以来、ずいぶん収まりかけていたのが、早坂の件でまた戻ってきたらしい。

それにしても――。冬輝は、その黒い塊を視界にしっかりととらえながら思う。

生徒と教師が相次いで自殺したことにより、この「区立かしわ第一中学校」の知名度はすっかり全国区になった。毎日テレビのニュースやワイドショーで、かしわ中の名前が垂れ流しにされている。今、日本でかしわ中の名前を知らないやつは、おそらくいないだろう。いわば超有名中学校ということだ。そしてそれを操っているのは、まぎれもなくこの自分なのだ。

門に近付くと、冬輝の鼻先にたちまちマイクが向けられる。

「先生の自殺をどう思いますか」

「早坂先生は、ふだんどんな先生でしたか」

「亡くなった曾根くんは、早坂先生のことで何か言っていましたか」

腕章を付けたレポーターたちは、眉毛をしかめたり寄せたりして、いかにも悲しげな表情を作っているが、その目は何か見えそうなネタを言え、言うんだ、と相手を脅迫している。

ま、それも当然だろうな、と冬輝は思う。大体、赤の他人が何人死んだところで、悲しいわけがないんだから。

「全部俺がやったんだよ！」　そう大声で叫びそうになる気持ちをおさえながら、何も知りません、僕も悲しいんです、という顔をしてカメラの前を通り抜ける。その瞬間、冬輝の身体をある種の快感が突き抜けた。

爽快だ。実に爽快だ。おまえらが必死で知りたがっている真実は、俺が握っているんだよ。この俺がな。誰を殺すかは俺の自由だ。すべての人間の命は、俺の手の中にある――。

気がつくやうに、冬輝はいいよのうな万能感で満たされていた。その優美な感覚は、冬輝が十四年間の人生の中で、初めて知る感覚だった。

7 クラスメートの死 II

担任が教室に来る前のこの時間は、時間割りによると一応、朝読書の時間ということになっているらしい。が、当然といえば当然だが、まともに本を読んでもやつなんかほとんどいない。くだらないおしゃべりに夢中になっているか、そうじゃなければ意味なくその辺を走り回っているか。そんなやつばかりだ。こんな実態を知っているくせに、PTAには、「朝読書を始めてから、生徒たちの様子が本当に落ち着いてきました」なんて言ってる教師連中はタヌキだな。冬輝はそう思いながら、広げていた文庫本を閉じ、机の中に放り入れた。

次に殺したいやつは誰だろう――。

そして、まるで豚小屋みたいな教室の中をゆっくりと見回してみる。

殺したいやつ。いや、もっと端的に表現したほうがいい。そうだ。削除だ。削除したい人間。考えてみれば結構いっぱいいるもんだ。手始めにあいつだ！

冬輝は、斜め前の席でギャアギャアと下品な笑い声をあげている女子生徒を見た。

赤間樹里（じゅり）。あいつを見ると、嫌でも一年前――中一の冬のことを思い出す。

ルックスもまあまあで、クラスでも目立つほうだった樹里に、冬輝はひそかに好意をもっていた。そして、樹里の自分に対する態度を見る限り、向こうにもその気がないわけじゃない、という確信もあった。だからあの時、放課後の廊下で、誰もいないのを見はからって、自信満々で告げた――なのに。

「何で私があんたなんかと付き合わなきゃいけないの。バカじゃないの」

そう言われた時のあの屈辱感。もうとっくに忘れたつもりだったのに、こうして改まって思い出してみると、まだリアルにズキッとくる。

俺も結構、執念深い男なのかな。冬輝は一人うそぶいた。

あれから聞いた噂によると、あの女はいろんな男と付き合っては別れるということを繰り返しているらしい。いや、それだけなら単なる個人の勝手だが、あの女の許せないところは、それをおもしろおかしく周囲に話し回っていることだ。あの男はエッチの時どうだったとか、こっちの男のテクはどうだとか、あることないこと言いふらしている。

その中には冬輝のことも含まれているぜ、と誰かが教えてくれた。それがどうやらあの女の都合のいい話にすりかわっているようで、断っても断っても冬輝がしつこく電話をしてきてキモイとか、ウザイから早くあきらめてほしいとか。そんなふうに言っているらしい。その話を聞いた時は、怒りでおかしくなりそうだった。身体中の毛穴からマグマのような熱いものがしみ出してくる。あんなに人を憎いと感じたのは初めてだ。

冗談じゃない。あれ以来あの女とは、しつこく電話するどころか、口もきいていないってのに。最低な女だ。いくらちょっとばかり顔がよくたって絶対に許せない。あんな女、この世からいなくなったら誰も困らない。いや、むしろ世の中のためだ。

「死ね。死んでしまえ」

冬輝は、周囲には決して聞こえないようにそうつぶやいた。そして、スローモーションの演技をするように時間をかけてゆっくりと顔を上げた。

いた。あいつだ。やっぱり現れた。黒板の横に、冬輝の分身が立っている。

さて、今日はどんな方法であの女を殺してくれるんだ？ 冬輝はそう問いかけるように、分身に向かってにっこりと笑ってみせた。同時に、昨夜の電話でのやりとりを頭の中に並べてみる。

「わかんないことがあるんだけどさ」

「うん。何でも聞いてよ」

「俺の分身とかいうやつは、殺人方法をどうやって決めているんだ？ 曾根は窓から突き落とし、早坂の時はナイフで刺した。毎回同じじゃないんだろ」

「君が殺したい方法で」

「は？ 俺？」

「そう。君が無意識に殺したいと思っている方法で実行する」

「待てよ。俺、そんなこと何も思ってなかったぞ」

「だから無意識に、って言ったでしょ。もちろん意識することもできるよ。今度は実際に頭の中で殺人のシュミレーションをやってみるといいよ。アイツはその通りに実行してくれるはずだから」

――ということだった。

冬輝は、軽く目を閉じて想像を始めた。もし電話の声のいうことが本当なら――。

上官の指示を忠実に実行する兵士のように、黒板の前のアイツが動き出した。そして、後ろから樹里に近付いて、いきなり彼女のスカートをつかみ、めくり上げる。

「やだ、何なの！」

樹里のすっとんきょうな声が響いた。瞬間、クラス中の視線がシャワーのごとく樹里に注がれる。

「なに？ なんなのこれ」

樹里は必死でスカートを元に戻そうとするが、アイツはひだの寄ったそれをしっかりつかんだまま離さない。当然樹里にはアイツの姿は見えない。空中に浮かんだスカートを下げようとやっきになっているわけだ。が、もちろんそうはさせない。その間、樹里の太ももはあらわになったままだ。

「樹里、どうしたの？」

「何やってんの？」

樹里のわめき声が高まるのと比例して、クラス中の騒ぎも大きくなっていく。

つまんねえな。

冬輝は舌打ちをした。

赤い顔をして慌てふためく樹里を見ているのは確かにいい気分だが、ただこれだけじゃつまらない。予想はしていたが、やはりスカートの下に体操着のハーフパンツをはいている。これじゃだめだ。

――よし行け！

冬輝の想像通りにアイツが動き出す。まず、あいているほうの手で樹里の腕をつかみ、無理矢理椅子から彼女を立ち上がらせる。そして片手でスカートを持ち上げたまま、もう片方の手で一気にジャージと下着を引き下げる。

「いやああっ！」

樹里の悲鳴と同時に、オーッという男子たちの歓声が上がった。冬輝の位置からは、妙に丸っこい尻が見えただけだったが、前方にいたやつらには、樹里のあの部分――女の秘所が丸見えだったはずだ。樹里はしゃがみ込んで大声で泣き出した。

「樹里！」

数人の女子が慌てて駆け寄っていく。

――やった。

冬輝は一気に溜飲が下がるのを感じた。すっとした。いつも気取った顔をしているやつが、へっ、いいざまだ。男をなめるからこうなるんだよ。ざまあみろ。

「おまえら、なに騒いでるんだ！」

ガラッと戸が開いて、担任が教室に入ってきた。樹里はまだ足首に白いパンティーをからませたまま泣いている。

「どうした？ 赤間――」

担任の目が樹里の姿をとらえた瞬間、中年のじじい特有の赤ら顔がたちまち蒼白に変わっていった。さすがにここでどういう類のことが起きたのかを察したらしい。

「みんな、静かに自習していなさい！」

担任は、素早く樹里を抱きかかえて教室の外に連れ出した。

何人かの女子が樹里について外に出ていき、残ったやつら、主に男子だが、

「すげえよな」

「見たかよ」

口々に今しがたおこった衝撃的な出来事の感想を言い合った。確かに健康な男子中学生にとってこんな刺激的なことはない。みんな口泡どころか鼻血でも飛ばしそうな勢いだ。

――チェ、何だよ。もっと過激なことをアイツにやらせてもらうつもりだったのにな。

冬輝は、分身に向かってちょっと首をすくめてみせたあと、

――まあいいさ。もし予想通りなら樹里はきっと……。

みんなに合わせるように、にっと笑った。

次の日の朝。洗顔を済ませて廊下に出ると、ミホのキンキンした声が耳に飛び込んできた。うっそー、だの、やばいじゃん、だのとわめいている。

――来たかもな。

冬輝は、気を引き締めてリビングの扉を押し開けた。

「あっ、冬輝、冬輝！ あんたの学校でまた自殺だってよ」

「えっ、嘘だろ」

と、ミホに合わせるふりをしてテレビに目をやる。

ニュースによれば、今日の明け方、かしわ第一中学校の二年生の女子生徒が、マンション十五階にある自宅ベランダから飛び降りた。すぐに病院に運ばれたが間もなく死亡。遺書はなかった。警察は今のところ自殺と事故の両面で捜査をしている――ということだ。

名前は出ていないが、これは絶対に赤間樹里だ。冬輝は確信した。いや、自分だけじゃなく、今これを見ているクラスの連中は、全員が同じことを思っているはずだ。

自殺の原因は、間違いなく昨日のあのことだ。人間にとって、人前でパンツを下げられるほど、人格やプライドをずたずたに破壊される行為はない。ましてあいつは女だ。多感な十四才の少女が、みんなの前で下半身をもろにさらされたのだ。しかも、完璧に無抵抗な状態で。これで平気な顔で生きていけるほうがおかしい。普通の神経をもった人間なら、まず生きてはいられないだろう。

ちょっと人よりかわいい顔をしてると思って、男を小ばかにしていた罰だ。ま、自業自得ってやつだな。

――削除完了。冬輝は心の中でガッツポーズをした。

どこの局でも、今朝はこのニュースをトップ扱いで取り上げているようだ。何しろこの一ヶ月の間に、同じ学校の生徒と教師が合わせて三人も自殺したのだ。ワイドショーの格好のネタには違いない。

母親も、クソ忙しい時間帯だというのに、テレビの前に座りこんで画面を真剣に見入っている。

「ねえ、この女の子、あんた誰だか知ってるの？」

「知るわけねえだろ」

「だって同級生じゃないの。もしかしたら同じクラスの子かもしれないわよねえ」

「さあ」

「嫌ねえ。こんなに次々と自殺が続くなんて。一体どうなっているのかしら」

冬輝は黙ってトーストをかじった。かじりながら、もし自分の息子がやったことだと知ったらこの人はどんな顔をするんだろうな、と一瞬思ったが、すぐに興味を失った。そもそも母親の感情のことなど、冬輝にはあまり関心がない。

「あんたの学校、呪われてるんじゃないの？」

ミホがまた片方の眉を上げながら言う。

「こら、ミホ！ 変なこと言うのやめなさい」

「だって変じゃない。絶対何かあるよ」

「いいからもうあんたは早く学校に行きなさい」

母親はミホを追い立てて、自分がその席に座り、冬輝と真正面に向き直った。

「冬輝、あんた何か心当たりはないの？」

「何だよ、心当たりって」

「学校で何か問題があるんじゃない。たとえば・・・ひどいいじめがあるとか。どうなの？」

「別に」

「冬輝も、もし誰かにいじめられたらちゃんと親に言うのよ。絶対に一人で悩んでちゃだめ。わかった？」

バカじゃねえの。冬輝は答える代わりに、紅茶のティーバッグをお湯の中で乱暴に揺らした。

自分がいじめられていることを、親にぺらぺらと話せる中学生がどこにいるんだよ。もしそんな奇特なヤツがいたら、お目にかかりたいもんだ。親になんか、いや、親にだけは、死んでも言えるわけがない。ちょっと考えればわかるはずだろう。それなのに「何かあれば子供は自分に話してくれるはず」なんて安心しきっている親はクズだ。

「聞いているの？ 冬輝」

「わかったよ。俺もう行くから」

冬輝は、残りのパンのかけらをかじったまま立ち上がった。

## 8 老人たちの死

「よっ」

マンションの敷地を出てすぐ、達也に肩をたたかれた。

「よう」

「なあ、今朝のニュース見た？」

「ああ。樹里のдар」

「アレってさ、絶対昨日のことが原因だよな」

「だろうな」

「これでクラスで二人目だぞ。呪われてんじゃね？ 俺らのクラス」

「うちの姉ちゃんも同じこと言ってた」

「こわくねえ？」

「だよなあ」

「今日は授業どうなるのかな」

「つぶれるだろ」

達也といつものように話しながら、冬輝はいつのまにか身震いするほどの快感に包まれている自分に気がついた。――まただ。前にも一度味わった感覚だ。

（電話のヤツの言う通り、俺はトクベツなチカラを手に入れたのだ。これでこの世の中のすべての命は自分の手の中にある。何もかも俺の思うままだ）

その事実、冬輝の奥にある何かを激しく興奮させた。

曾根と早坂と樹里が死んだ。でもこの世からいなくなしてほしいと思うやつは、あの三人以外にもたくさんいる。たとえば……。

冬輝は達也の半歩後ろを歩きながら、学校の連中の顔を思いつくまま頭の中に並べていく。まるで、道端にシートを敷いて、商品を展示するように。

――まず隣のクラスのKだろ。あいつはどうも気に入らねえ。ちょっとばかしサッカーがうまいことを鼻にかけやがって。削除だな。それから、バスケット部のR。あいつは何だか知らないけど女にモテるんだよな。たいして顔もよくないくせに。ちょっと背が高いだけじゃねえか。くそ、あいつも削除だ。あとは……そうだ、この前転校してきたデブ女。Uっていったっけ。あんな女、視界に入ること自体が迷惑だ。即、削除決定。めんどくせえから、ブスとデブはみんな削除してやる。気に入らねえのは生徒だけじゃない。教師だってみんなクソばかりだ。まともなやつを探すほうが難しいぞ。しかしまあ、よくよく考えてみりゃあ、削除したいやつなんてあげればきりがないんだな。この分じゃ最後には、自分以外全員削除しなきゃいけないかもな。

そのあまりの非現実的に、冬輝はつい笑い出したくなった。

気がつくと、達也がずっと前の方にいる。

「何してんだよ、冬輝。遅れんぞ」

「ああ、ごめん」

冬輝は歩幅を広めた。

向こうからおばあさんが歩いてくる。腰が信じられないほど曲がっている。あの姿勢でよく歩けるもんだな。冬輝はその小人みたいな老婆の姿を見ながら思った。

この辺りは下町というのか、いわゆる新興住宅地ではないため、町の中にやたらと年寄りが多い。一体どこからわいて出てくるのかと思うほどだ。道でその老人たちとすれ違うたびに、

(汚ねえなあ)

冬輝はいつもそう思う。生気のない顔に、くすんだ色の服。見苦しい身体。あんな無様な姿をさらして、こいつらいつまで生きているつもりなんだろう。生きてたって何の役にもたちゃあしねえのに。

「死ね」

老婆とすれ違う瞬間、冬輝は口の中でつぶやいた。すぐに分身であるアイツが現れて、その老婆に殴りかかっていく。不意をつかれた上に、中二の男の力で思い切り飛びこまれたのではたまらない。老婆はウッと呻き、その場に倒れこんだ。

「おばあさん！ 大丈夫ですか」

「大変だ、救急車！」

異変に気付いた通行人たちが騒ぎ出し、たちまち人だかりができる。が、誰が見ていたとしても、年寄りが急に具合が悪くなって倒れたとしか思わないだろう。

その様子を見ながら、冬輝はあることを決心した。

——こいつらを削除してやる。

テレビのニュースで、毎日のように高齢化社会だ、少子化だと大人たちが憂いている。どうやら今、日本は大変なことになっているらしい。要はこいつらが長生きしすぎることが原因なんだ。いつまでもチンタラチンタラしぶとく生きていやがって。寄生虫のような連中がいなくなれば、日本はよくなっていくはずだ。学校だけじゃなく、俺は社会を変えてやる。俺にはその力があるんだ。

じきに救急車のサイレンの音が聞こえてきた。

「おい、達也。行くぞ」

冬輝はすっかりやじうまの一人となっている達也を促し、歩き出した。

——とりあえずババア一匹削除完了。

それから、町内に住む高齢者が相次いで死亡する事件が続いた。

それまで元気だったお年寄りが、散歩の途中や買い物行き帰りなどにいきなり倒れ、そのまま死亡してしまう。遺体の状況は、口や鼻から出血があり、なおかつ腹部などに殴られたようなアザが見られるなど明らかに他殺を匂わせる外傷がみられたが、第三者の関与を立証できるような目撃証言がどうしても得られなかった。そのため、彼らの死はすべて自然死ということで片付けられた。

怯えた高齢者たちは、いつしか外を出歩かなくなり、町の中からその姿が消えた。病院にも集会所にも公園のベンチにも、どこからも。

その頃、国営のテレビ局あてに一通の手紙が送りつけられた。

「愛する日本のために、この俺が高齢化問題の改善策を提案してやろう。ことは簡単だ。諸悪の根源である老人たちを、社会から削除すればいいのだ。現在すでに老人である者はもちろん、この先国民が六十才になったら、収入、地位、職業などに関わらずすべての対象者を自動的に処刑する。そういう法律を、政府が今すぐ作ればいい。素晴らしい発案だと思わないか？ この法律は、絶対に将来日本を救うことになるはずだ。俺が保障しよう。そもそも、醜い老人など生きる価値がないのだ。あいつらを生かすために、若者が犠牲になるような社会の仕組みは間違っている！ 生産性のない、ただ食って寝るだけの老人と、未来ある若者と、どちらが大事なのか考えるまでもないだろう。ただ俺には、法律が施行されるのをのんびり待っている時間はない。こうしている間にも、日本中に薄汚れた老人たちがどんどん増殖しているのだ。無策な政府に代わって、俺が邪魔者たちの削除を実行していくことにする」

警察はマスコミを通じて、この奇妙な手紙の内容を国民に公表し、すぐさま捜査本部をしいた。このあまりにも衝撃的な内容に、国民の間では波紋が広がり、様々な議論がわき起こった。テレビのニュースやワイドショーでは、文化人や作家やコメンテーターと称する人間が連日批判の言葉を繰り返す。こんなとんでもない思想をもつ人間は、一体どんなやつなのだ。きっと頭がおかしいヤツに決まっている。どう考えても気がふれているとしか思えない。

が、予想外のことが起きた。日がたつにつれ、国民の中に手紙の主の意見に賛同するものが現れたのだ。確かに、もう役に立たなくなった老人に、生きている価値などないのではないか。命は大事だの、お年寄りを敬おうだの、そんな建前論ばかり言っていたら日本はいつか滅びてしまう。ある意味、手紙の主が言っていることは本質をついている。正しい意見だ。いつしか国民の一部でそんな論調までわき上がった。

それは、高齢者たちをより一層怯えさせるのはもちろん、世の中の秩序やモラルの混乱をまねくには十分な力を持っていた。

## 9 最後の死

学校や町から、うざいやつが消えた。

——どうだ。いい社会になっただろう。すべて俺のおかげなんだぜ。

冬輝は、わき上がってくる誇らしい気分をもて遊びながら、家までの道を歩いていた。人目があると思いながらも、自然と顔がほころんでくる。

——これからも俺は、自分の理想の社会を作っていく。そのためにも、目障りなやつらはどんどん削除してやるんだ。そう、即だ。俺にはむかうヤツはみんな削除の対象だ！ 全知全能の神がいるとしたら、それはまさに、この俺のことかもしれないな。

冬輝はこのところずっとそんな昂揚感に包まれていた。神経がとぎすまされて、血管がむき出しになっているのではと思うほど過敏になっている。しかしそれは、決して不快さを運ぶものではなく、むしろ心地いいものだった。

マンションのエレベーターに乗り、いつものように自宅のある七階のボタンを押す。冬輝を乗せたその四角い箱は、少し全体を振動させたあとすぐに上昇を始めた。

エレベーターが動き出すのを待っていたかのように携帯の着信音が鳴った。冬輝は反射的にカバンの中をまさぐる。

——俺のじゃない。じゃあどこだ？ どこで鳴っている？

背後だ！ 冬輝は後ろを振り向いた。

もちろんそこには誰もいない。いるはずがない。見慣れた鏡の付いた壁があるだけだ。しかしまだ音は鳴り続けている。

一体どこから……。冬輝はその壁を凝視した。足元に近い部分に鍵がついている。ここは住人が亡くなった際、棺桶を運び出す時に使うトランクルームになっていると聞いたことがある。

要は、この壁の奥に人間一人が入るスペースが隠されているということだ。

——まさか……。いや、でもそんなばかなことが——

はっと気付くと、エレベーター内の表示パネルの電気が消えている。いつもならもうとっくに七階に着いているはずなのに。しかし、エレベーターはそのままグングンと上昇を続けている。七階どころか、最上階も通り過ぎているのではないか。扉の向こうは真っ暗だ。

何だこれは？ 何が起きたんだ。

「止まれ！ 止まれって！」

冬輝は大声で叫びながら、今まで一度も触ったことのない非常用のブザーを押した。が、そうしている間にもエレベーターはものすごいスピードで上昇していく。着信音もまだ鳴り続けている。しかもその音はだんだん大きくなっていく。

間違いない。壁のトランクルームの中、ここから聞こえているんだ。この中から……。

「止めろ！ 誰か止めてくれ！」

冬輝はわけのわからない恐怖に襲われ、扉に張り付くようにして怒鳴り声をあげた。

「君が全然僕に電話をくれないからいけないんだ」

突然、あの声が聞こえた。電話の声だ。

「おまえか！ おまえのしわざか！」

「約束だったのに。電話をしてくれるって」

「いいから早くこれを止めろ！」

「友達になってくれるって言ったのは嘘だったんだね」

「止めろって言ってるだろ！」

冬輝の声に重なるように、いきなり後方の壁面がせり出してきて、中からステンレスの箱が飛び出してきた。その中に白骨化した死体が横たわっている。

「うわっ！」

「君がいけないんだよ。僕はずっと待っていたのに・・・」

死体は学校の制服らしいものを身につけていた。白いシャツにくすんだ青色のブレザー。ベージュ色のズボン。胸の部分にはネームプレート。首のあたりにえんじ色のネクタイが巻きついている。そして、横に転がった携帯――。

「言っただろ。僕、ずっと一人で寂しかったんだ」

「や、やめろ・・・」

「君とならいい親友になれると思ったのに」

死体の上半身が徐々に起き上がってくる。

「結局君は、僕をただ利用しただけなんだね」

「やめろ・・・く、来るな！」

冬輝は必死で後ずさりをするが、どこにも逃げる空間などない。

「残念だよ」

「来るな！」

死体がとうとう冬輝に覆いかぶさった。

「ギャアアアアアア！」

冬輝の絶叫が、闇に吸い込まれるように小さくなっていき、ガタンと鈍い音を立ててようやくエレベーターが止まった。

削除完了。誰かの声が響いた。

数日後。家財道具を積んだトラックがマンションの前に停車した。

慌ただしく荷物を運ぶ両親のそばで、髪の毛を赤茶色に染めた少年が、暇をもてあますように携帯をいじっている。

「何してるの！ あんたも手伝いなさい」

「うるせえな」

母親に叱られても、少年は携帯をいじるのをやめようとはしない。

あーあ。引越しなんてダルいなあ。親の都合で決めたんだから、てめえらだけで勝手にやりゃあ

いいんだよ。俺は知らねえ。

少年は悪態をつきながら、まだ携帯をいじり続ける。

「ありがとう。嬉しいよ。電話してくれて」

急に携帯から変な声がして、少年は驚いて顔を上げた。

「誰だよ、おまえ」

「僕、ずっと一人ぼっちなんだ。友達になろうよ」

「だから誰だよ。おまえ」

「ずっと待っていたんだ。誰かが電話してくれるのをね——」